

紀要

29

滋賀県出土の「丸石」研究ノート小島 孝修(1)

古代における土器製作技術の一側面

ー長浜市横山城遺跡出土カマド形土器を中心にしてー辻川 哲朗(8)

将棋史研究ノート7

ー桂馬と香車の動きと性格ー三宅 弘(17)

中世塩津港の開発重田 勉(21)

滋賀県内における遺跡出土の石臼

ー集成と地域的特徴の把握ー加藤 達夫(27)

滋賀県出土の「丸石」研究ノート

小 島 孝 修

1. はじめに

「丸石」という遺物をご存じだろうか。長野県・山梨県の境界にそびえる八ヶ岳の山麓には、縄文時代の遺跡が多数分布しているが、それらの遺跡を中心に出土することがあるという、文字通り丸い石のことである。ただし、後述するように、実用品とは思えないほどの大きさと重さがあるものが多く、祭祀遺物ではないかと推測されている。

滋賀県内では、これまでに「丸石」の出土事例は報告されていなかったが、筆者はかつて磨石として報告された彦根市六反田遺跡と大津市穴太遺跡から出土した石器が、「丸石」ではないかと考えるに至った。本稿の目的は、これらを紹介し、「丸石」が滋賀県内でも出土する可能性を指摘することにある。

2. 筆者の「丸石」認識の経緯

最初の「丸石」の認識 筆者が「丸石」を始めて認識したのは、平成24年（2012）12月に大阪府立弥生文化博物館で開催されていた特別展『縄文の世界像―八ヶ岳山麓の恵み―』を見学した折である。展示されていた「丸石」は、長野県諏訪郡富士見町大花遺跡から出土したもので、長軸約27cmの卵形を呈したものであった（図2）。展示図録（大阪府立弥生文化博物館2012）には、「八ヶ岳山麓の縄文遺跡からひとかかえもある丸い石が出土する。この地域に特有のもので、「丸石」と呼ばれる。実用品とは考えにくく、まつりに関係する遺物とされる。前期から出現するが、このときは住居外から出土する。中期になり竪穴住居の中から出土するようになり、晩期の配石遺構の中にもみられる。」との記述（22頁）があり、北杜市社口遺跡の「炉に詰められた丸石」の写真（23頁）も掲載されている。

筆者は「丸石」という遺物をそれまでに認識したことがなかったし、かつ、「丸石」を見た記憶も、学生時代より八ヶ岳山麓の各展示施設を見学したことも何度かあったにもかかわらず、まったくなかった。試しに、いま手許にある八ヶ岳山麓に立地する遺跡の発掘調査報告書（小林ほか1988、小松ほか2004など）を読み返してみると、確かに「丸石」や「玉石」などと表記された、ひとかかえもある磨石状の遺物が掲載されているのを確認することができる。

滋賀県内での「丸石」の認識① 弥生文化博物館特別展を見学してまもなく、当協会が実施した彦根市六反田遺跡の発掘調査で出土した、「丸石」と考えられる石器の存在を、調査担当者である堀真人氏から教えられ、実見することがあった（図5）。発掘調査の状況やこの石器の詳細につい

ては、後述したい。

この時には、1週間ほどと時を置かずして類似した遺物を知ることができたものの、「八ヶ岳山麓と同様の遺物が滋賀県内でも出土しているのか」程度の認識しかなく、それ以上考えが深まることもなかった。そして、「丸石」について検討せずに、そのまま3年間が過ぎることとなってしまった。

滋賀県内での「丸石」の認識② 平成27年8月、大津市埋蔵文化財調査センターにおいて開催されていた企画展示『大津の縄文時代』を見学する機会を得た。滋賀県南部に位置する大津市域は、開発の頻度が比較的多いという状況も手伝ってか、県内でもとくに縄文時代の遺跡が数多く見つかっているし、さらに、多くの成果が上がった著名な遺跡も少なくない。

この企画展示では、5遺跡を時期ごとに、すなわち真野遺跡（早期）・雄琴段々遺跡（前期）・粟津湖底遺跡（中期）・穴太遺跡（後期）・滋賀里遺跡（晩期）を選び出し、それぞれ代表的な遺物を抽出して展示構成がなされていた。これらのうち、真野遺跡・雄琴段々遺跡・滋賀里遺跡は大津市教育委員会が実施した発掘調査の成果が、粟津湖底遺跡・穴太遺跡は滋賀県教育委員会および当協会が実施した発掘調査の成果が展示されていた。「丸石」と考えられる石器は穴太遺跡の出土遺物に含まれていた（図8）ののだが、こちらもたびたび調査報告書を開いているにもかかわらず、まったく認識していなかった。出土した発掘調査やこの石器の詳細についても後述したい。

筆者は、これらの「丸石」と考えられる石器の存在を認識したことにより、滋賀県内でも、これまでに認識・報告されていないだけで、実際には「丸石」が出土している可能性があるのではないかと思い至ったのである。

次章では、筆者が確認した2つの「丸石」と考えられる石器とその遺物が出土した遺跡およびその発掘調査について、具体的に見ていくこととしたい。

3. 滋賀県出土の「丸石」の事例報告

彦根市六反田遺跡出土の「丸石」 六反田遺跡は、彦根市宮田町・鳥居本町に所在し、古墳時代から平安時代にかけての散布地として周知されていた（滋賀県教育委員会2011）。東西を山地に、北を琵琶湖の内湖（地理学的にいう潟湖・ラグーン）の1つである旧入江内湖（戦中・戦後に揚水で干拓されて現在は陸地化）に囲まれた平野部に立地する。この平野部は、東側の山地から流れ出す矢倉川の

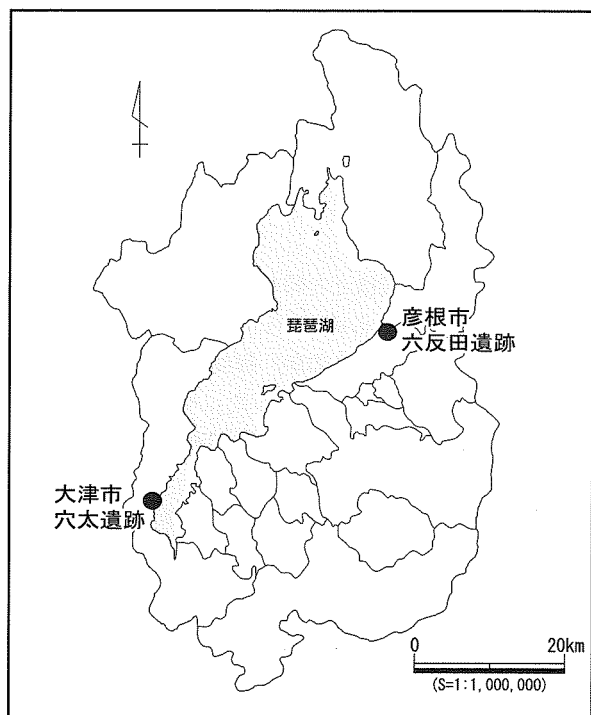


図1 彦根市六反田遺跡・大津市穴太遺跡 位置図

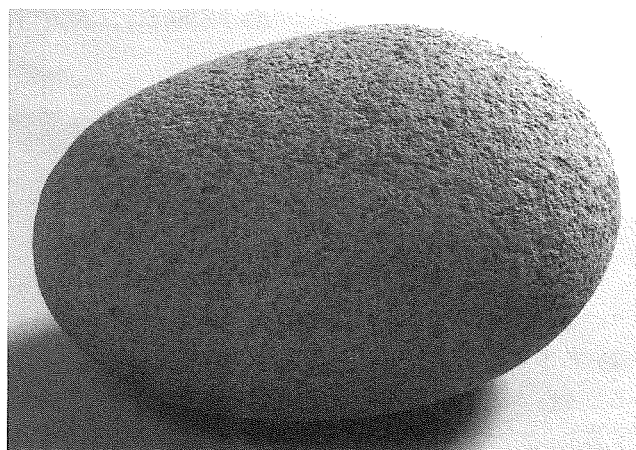


図2 長野県諏訪郡富士見町大花遺跡出土丸石
(大阪府立弥生文化博物館 2012)

表1

出土遺跡	六反田遺跡 (彦根市宮田町)	穴太遺跡 (大津市穴太町)
遺跡の立地	氾濫原(旧入江内湖まで約1.5km)	扇状地(琵琶湖まで約0.5km)
遺跡の性格	集落	集落
時期	縄文時代中期末～後期前葉	縄文時代後期後葉
出土状況	河道南の青灰色粗砂層(堆積は古代)	配石遺構2の配石
形状・法量	扁球形, 長軸約22.0cm・短軸約16.2cm	扁球形, 長軸約18.0cm・短軸約12.8cm
報告器種	磨石	磨石
加工痕	全面に磨り目	全面に磨り目
重量	11.0kg	6.0kg
石材	流紋デイサイト	花崗岩

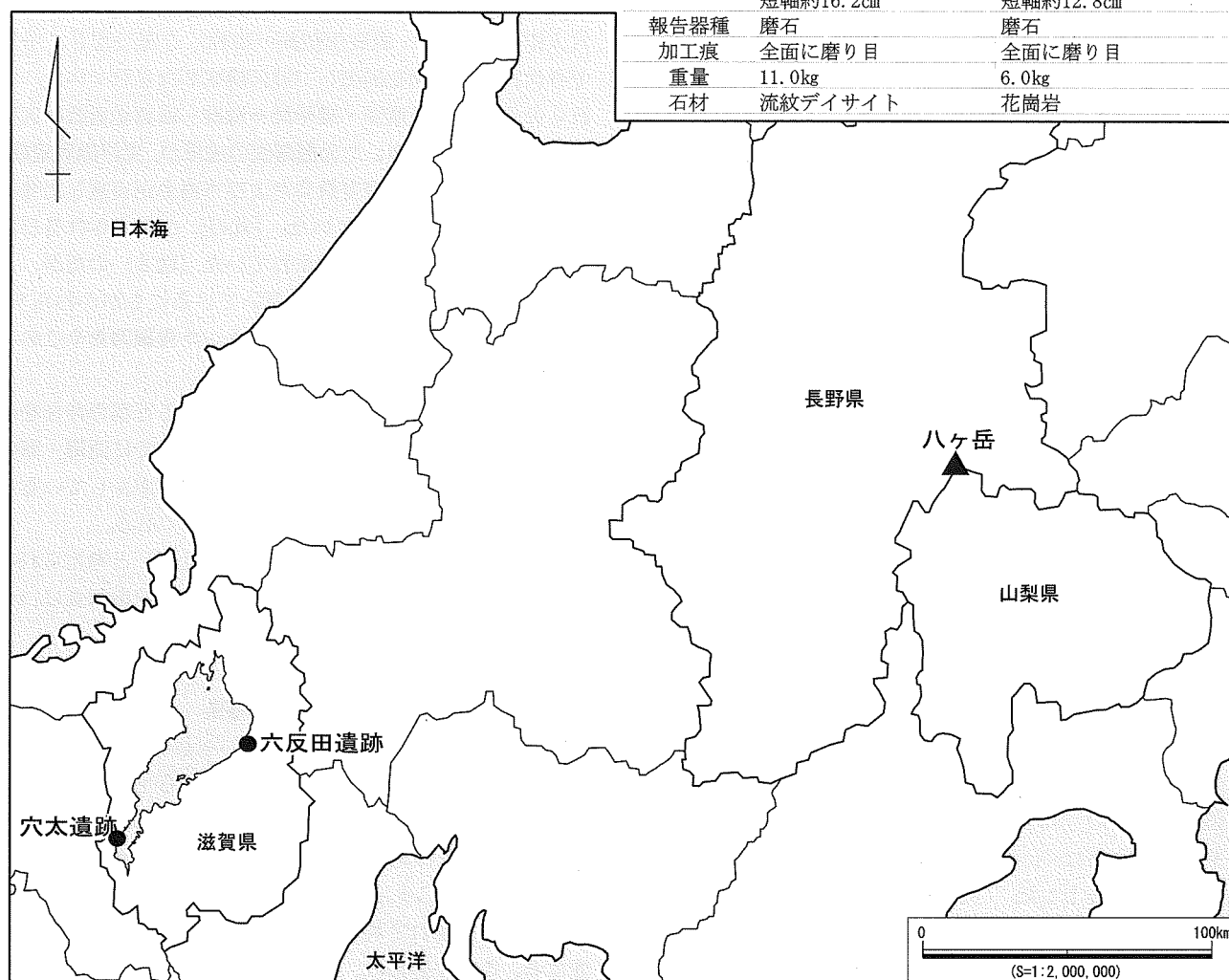


図3 滋賀県内「丸石」出土遺跡とハケ岳の位置

堆積作用で形成された扇状地および氾濫原・後背湿地からなり、小盆地状の地形を呈している。旧地形を推定復元してみると、六反田遺跡の東側に近接して流れる小野川と矢倉川の合流地点付近に立地していたと考えられる。近接して立地する縄文時代遺跡としては、米原市入江内湖遺跡や彦根市松原内湖遺跡などがある。北方にある旧入江内湖までの距離は約1.5kmである（図4）。

六反田遺跡の発掘調査は、平成19・20年度に、中山間地域総合整備事業に伴い、滋賀県教育委員会を調査主体、当協会を調査機関として実施し、2冊の調査報告書を刊行している。六反田遺跡における縄文時代の成果という、平成20年度調査（瀬口2013）の方が、比較的良好に知られているといえよう。この調査では、縄文時代後期後葉の堅果類貯蔵穴群と土偶1点、同晩期中葉の土器棺墓群などを検出し、多くの成果が上がっている。しかし、平成19年度発掘調査でも、縄文時代後期前葉の遺構を検出して、遺物には縄文時代中期末のものも含まれる。以上のことから、縄文時代の六反田遺跡は、後期段階の集落と晩期段階の墓地とすることができよう。

「丸石」と考えられる石器が出土したのは、平成19年度に調査を実施したT6の河川跡：河道南（幅10.0～18.0m・深さ0.6～1.1m）の4～6区で検出した青灰色粗砂層である（図6、堀2013）。遺構面は地表下約0.5mで検出され、検出高は標高92.7m前後である。

河道南は、出土遺物から6世紀後半から10世紀代にかけて機能していたと想定されているが、その中心時期は8世紀中頃と考えられている。青灰色粗砂層からは数多くの遺物が出土しているが、土器の大半が古代の須恵器・土師器である。したがって、「丸石」には縄文土器の共伴が判然とせず、厳密には縄文時代の遺物と判断することは難しい。ただし、河道南には、縄文時代の遺物しか出土していない第3層群があったり、そのほかの層からも少数ながら縄文時代の遺物が出土したりしている。これらの層から紛れ込んだ可能性と合わせて、そもそも古代の遺物とは考えにくいこともあり、報告書で示しているように、状況的には縄文時代の遺物と考えて差し支えないと考えている。

「丸石」と考えられる石器（図5、報告書掲載図156-1990）は、調査報告書の本文では「流紋デイスaitoで全面が平滑で、ボールのような形状である」（219頁）との記述があるものの、器種については触れられていない。しかし、巻末の遺物観察表には、出土地点：T6-M8区、器種：磨石、重量：11,000g（＝11.0kg）と記載されている。掲載された実測図（218頁）を測ると、平面形は長軸22.8cm・短軸21.9cmのほぼ円に近い楕円形であり、厚さ16.2cmを計る。すなわち、長軸約22.3cm・短軸16.2cmの扁球形といえる。断面図に人工的な磨り目を持つ表現がなされていることを合わせて考えてみても、この石器を「全面が平滑」な磨石として報告者は判断していることがわかる。

河道南から出土した縄文時代遺物の大半は第3層群から出土していることから、掲載番号1990の石器の所属時期は、同層群から出土した縄文土器の時期である縄文時代中期末（北白川C式）から後期前葉（北白川上層式2期）にかけてのいずれかと考えることが最も妥当であろう。ただし、そのほかの層から晩期後半の凸帯文土器が少量出土していることから、その時期である可能性もなくはないといえる。

大津市穴太遺跡出土の「丸石」 穴太遺跡は、大津市穴太町ほかに所在し、縄文時代から平安時代にかけての集落跡・寺院跡・瓦窯跡として周知されている（滋賀県教育委員会2010）。比叡山地から流れ出る、流長が約6.0kmと短い四ッ谷川が形成した扇状地に立地する。近接して立地する縄文時代遺跡としては、大津市滋賀里遺跡などがある。東方に位置する琵琶湖までの距離は約0.5kmである（図7）。

穴太遺跡の発掘調査は、昭和56年度から平成3年度にかけて、国道161号（西大津バイパス）建設事業に伴い、滋賀県教育委員会を調査主体、当協会を調査機関として実施し、4冊の調査報告書が刊行されている。古代寺院「穴太廃寺」の伽藍配置が良好な残存状態で検出されていることが特筆され、その一部は国史跡に指定されている。縄文時代の主な調査成果としては、後期後葉の堅穴住居・配石遺構・貯蔵穴などや、晩期後葉（凸帯文土器）の土器棺墓群などがある。そのほかにも、大津市教育委員会によって、複数回の発掘調査が実施されているが、縄文時代についてはほぼ同様の成果があがっている。以上のことから、縄文時代の穴太遺跡は、六反田遺跡同様に後期段階の集落と晩期段階の墓地とすることができよう。

「丸石」と考えられる石器が出土したのは、昭和58年度に実施したA地区FC区第4遺構面の配石遺構2である（仲川1997）。このA地区は、「比叡山から洪水・土石流の度に流出してくる花崗岩パイラン層による堆積」により、地表下約4.0mに埋没していたという。検出高は標高87.3m前後である。

配石遺構2は拳大～人頭大の円礫を幅0.3m・2段のコの字状に配したもので、その規模は、検出部分は縦3.6m・横2.8mを測るが、一部が調査区外に伸びるため全形は不明である。出土した土器から、本遺構の形成時期は、縄文時代後期後葉（元住吉山Ⅱ式）と考えられる（図9）。

「丸石」と考えられる石器（図8、報告書掲載図147-95）は、調査報告書に出土状況は記載されていないものの、その形状から、コの字状に配された「拳大～人頭大の円礫」の1つではないかと推測している。調査報告書の本文では、「83～98、敲き石・磨り石。凹石のような小孔が穿たれていないもの、断面が扁球形、球形を呈するものである。全面摩耗痕があるもの、片面のみ摩耗痕があるものがある」（114頁）と記載されるのみであり、95をはじめ個々についての説明はない。しかし、巻末の遺物観察表には、器種：磨石、形状：磨り面のみ、長さ：18.0cm、最大幅：

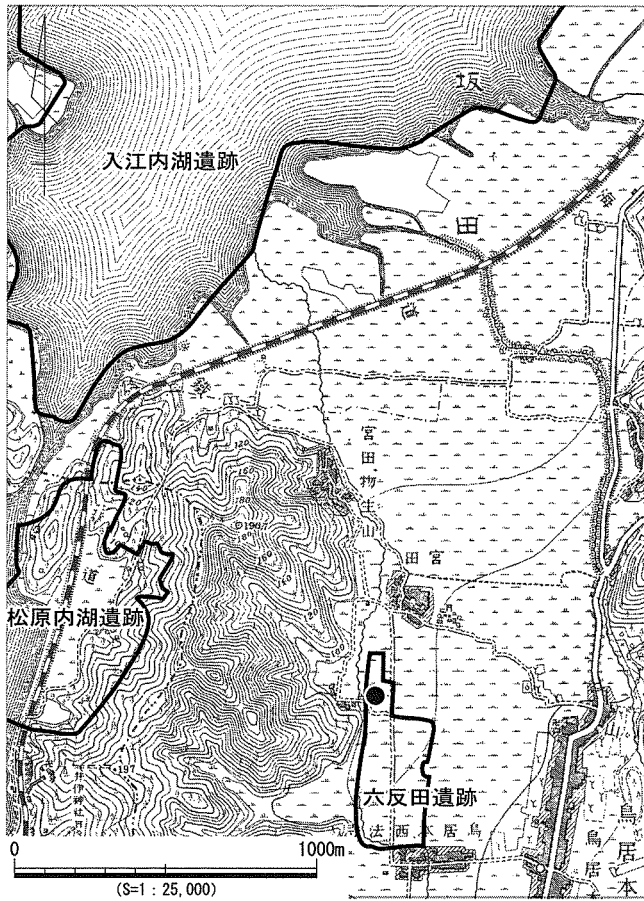


図4 六反田遺跡 位置図（●が出土地点）

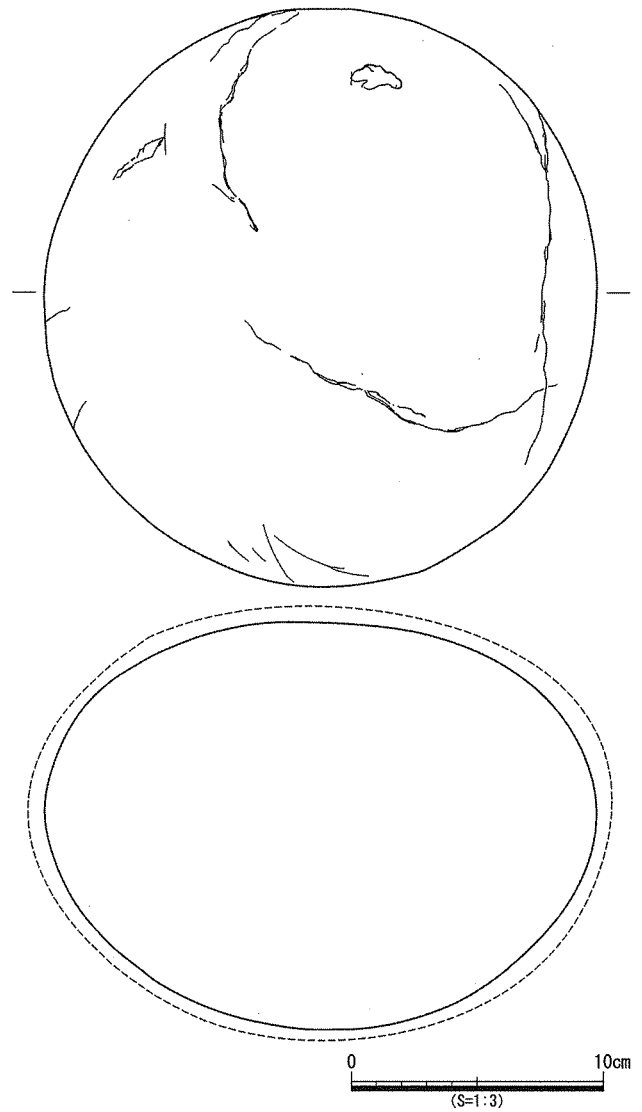


図5 六反田遺跡出土「丸石」実測図（堀 2013）

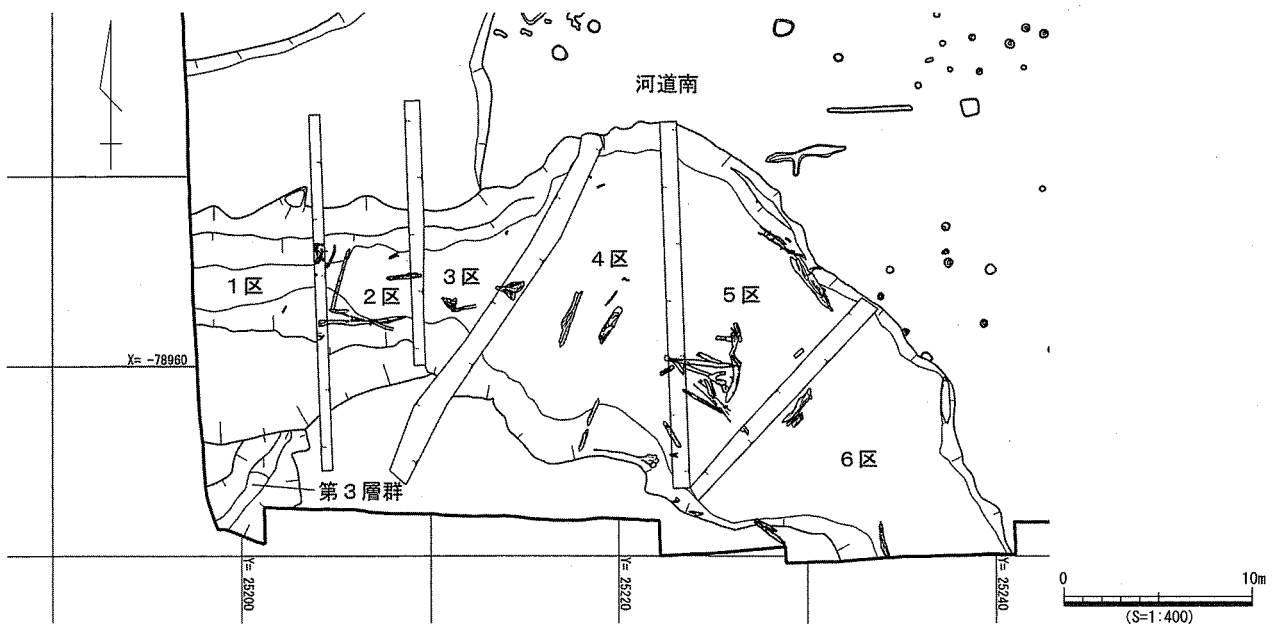


図6 六反田遺跡「丸石」出土 T6 河道南 実測図（堀 2013）

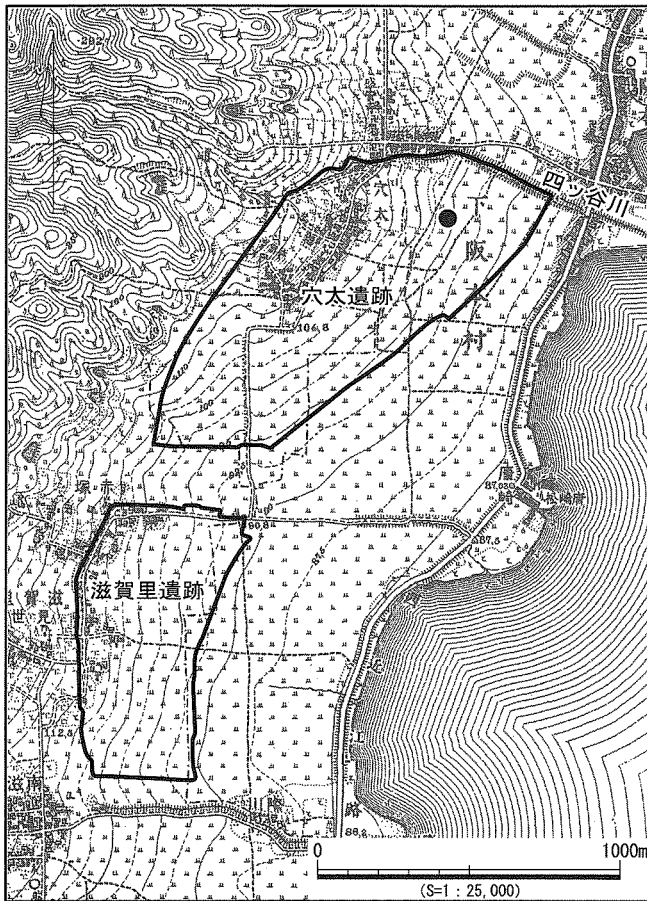


図7 穴太遺跡 位置図（●が出土地点）

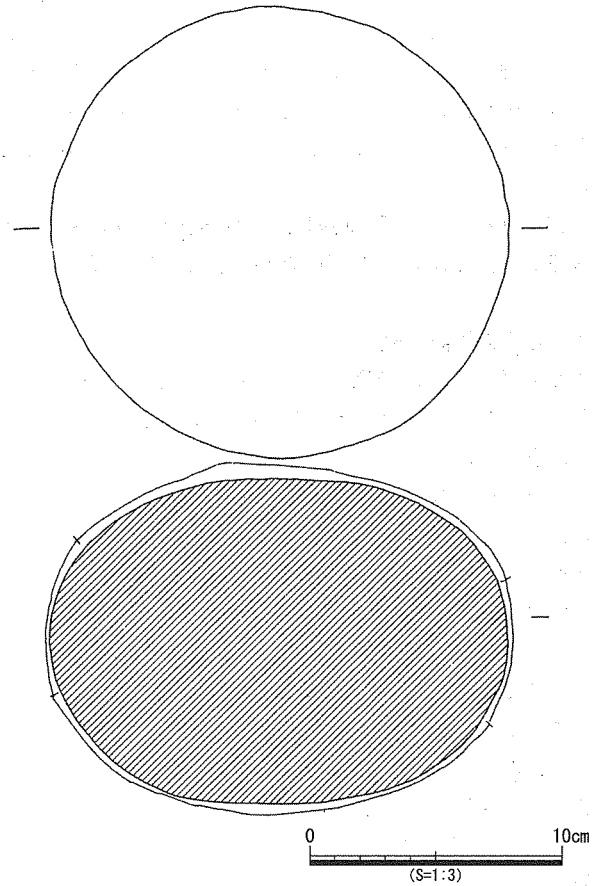


図8 穴太遺跡出土「丸石」実測図（仲川 1997）

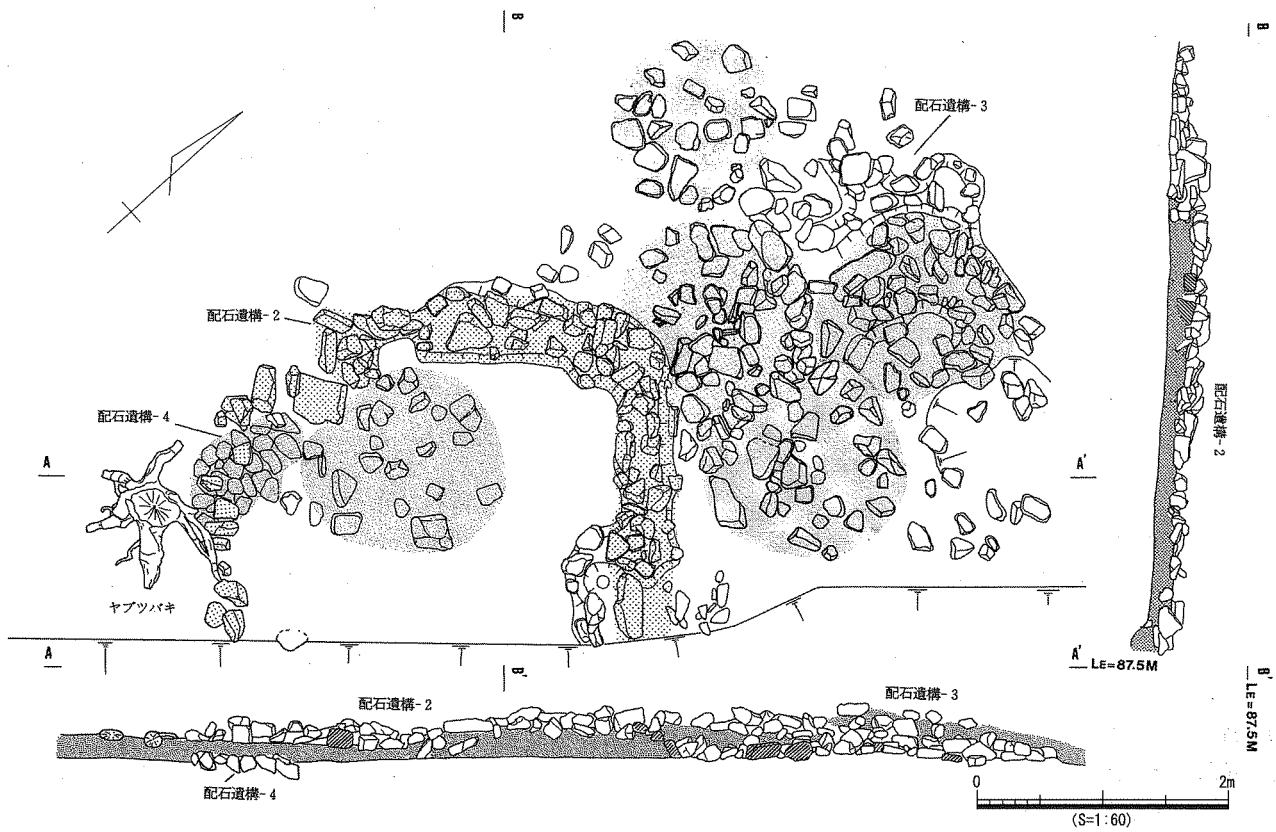


図9 穴太遺跡「丸石」出土 配石遺構2 実測図（仲川 1997）

18.1cm, 厚さ: 12.8cm, 重量6,000g (= 6.0kg), 石材: 花崗岩と記載されている。このことから、形状は長軸約18.0cm・短軸12.8cmの扁球形であり、断面図に人工的な磨り目を持つ表現がなされていることを合わせて考えてみても、全面に磨面を持つ磨石として報告者は判断していることがわかる。

この「丸石」の所属時期は、配石遺構2の形成時期である縄文時代後期後葉（元住吉山Ⅱ式）とすることができる。

4. 若干の検討（表1）

2つの「丸石」の特徴 以上を踏まえて、2例の「丸石」と考えられる遺物が出土した遺跡およびそのものの特徴を表にまとめた（表1）。

遺跡の性格などは類似する部分が多いものの、時期や「丸石」の出土状況は異なる。一方、そのものの特徴では、扁球形や全面に人工的な磨り面と思われる平滑面を持って「磨石」として報告されている点は共通するものの、法量・重量・石材などは異なる。

ここで問題となるのは、これらの法量・重量を持つ、全面に平滑面を持つ円礫が磨石として機能しているのか、という点にあると考える。磨石は、石皿とセットで木の実などをすり潰す用途が想定されている石器である。その法量については、磨る（する）あるいは敲く（たたく）という機能によって区別される敲石（たたきいし）とともに、「人間の手に保持することによって機能する礫状の資料」（町田2000, 283頁）とするのが筆者は妥当と考えている。すなわち、遺跡の発掘調査で出土した場合は、成人が片手で保持して使用できるようなサイズと重量を持つものを、基本的に磨石として認定することになっている。したがって、たとえ全面に磨り面がみられる円礫であったとしても、「人間の手に保持すること」が不可能なものについては、磨石として使用はできないと考える。

今一つの問題点としては、そもそもこれが遺物なのか、という点がある。この問題点については、六反田遺跡周辺の遺跡（彦根市松原内湖遺跡・同佐和山城跡・米原市入江内湖遺跡）の発掘調査を実施したことがある経験上、筆者がもし六反田遺跡の発掘調査を担当したとしても、このような遺物が出土すれば、間違いなく遺物として取り上げるだろう。すなわち、チャートの岩盤で構成される独立山塊である佐和山丘陵の周囲に位置するこれらの遺跡では、発掘調査で見つかる礫の多くはチャート角礫であり、それ以外のもの（とくに円礫）は、意図的に持ち込まれた可能性があると考える。ひとかかえもある扁球形を呈した円礫であれば、なおさらその可能性は高く、人の手によって意図的に持ち込まれたものであるならば、遺物として認定しても問題ないと思う。

一方、穴太遺跡については、その周辺の遺跡も含めて、筆者は発掘調査を実施した経験はない。したがって、同様

の経験則的な意見を述べることはできないが、この点については、調査担当者などに意見を求めるなど、今後の課題としたい。

以上をまとめると、六反田遺跡と穴太遺跡で出土した、「磨石」として報告された扁球形の円礫2点は、周辺地域で採取される可能性が低いことから、意図的にその遺跡（集落）に持ち込まれた遺物として考えられた。しかし、その法量・重量からすれば、磨石としての用途は考えにくい、となる。したがって、筆者は、実用品ではない「丸石」とするのが妥当ではないか、と考えた次第である。

丸石の性格 では、これまでに遺跡から出土した丸石とはいったいどのようなものなのか。丸石を論じたものとして、中沢厚氏の著作が手許にある（中沢1988）。少し古いものではあるが、その中に八ヶ岳山麓を研究フィールドとする考古学者を交えた座談会を収録した部分がある（「丸石神と考古学」）。この部分を中心に、本論に関係がある箇所を以下にまとめて、今後その性格を考える端緒としたい。

①**地域・時期** 八ヶ岳山麓の縄文時代の遺跡では、球形に近い礫＝丸石が出土することがあり、その時期は縄文時代前期末と同中期後半～後期初頭である。前者の出土事例は少ない。後者の出土事例は多く、その分布の中心は山梨県にあり、土器型式でいう曾利式文化圏になる。この地域では、民俗事例として現在でも丸石を祀っているところが多い。

②**素材・出土状況** 丸石は、民俗事例を参考にすれば、自然のものを採取しているようで、材質は多様である。石棒や立石とセットで出土することが多いことから、祭祀に関わる遺物ではないかと考えられている。縄文時代前期末の事例は住居外で出土し、縄文時代中期後半以降の事例は住居内で出土することから、安置場所が時期ごとに異なるようである。

これら2つの特徴を、滋賀県出土の2例に当てはめて考えてみたい。①の時期については、縄文時代前期末と同中期後半～後期初頭という2時期のうち、六反田遺跡例の縄文時代中期末～後期前葉が後者にほぼ近い時期であるが、穴太遺跡例の縄文時代後期後葉はこれらに当てはまらない。

②の素材については、まず、石材の選択は厳密ではないことがわかる。これは、滋賀県の2例の石材が同一ではないことに通じる。さらに、自然礫を採取していること、すなわち、球形という形状は人工的に手を加えた結果ではない、ということもわかる。山梨県の地質学に明るくはないので、そのような球形の礫がどれほどの頻度で採取できるのかは知らない。しかし、中沢氏の著作を読む限りは、川原や土中から採取された多数の丸石が現在も祀られているようである。滋賀県の2例についても、表面の磨り面が人工的かどうか、改めて検討を行う必要があると考える。本稿を記すにあたってこれら2点の石器を実見していないの

で、この点についても今後の課題としたい。

②の出土状況については、穴太遺跡例が配石遺構から出土しているものの、それはあくまで配石の一部であり、祀られている状況ではないと考える。六反田遺跡例は、後世に堆積した河川跡から出土していることから、出土状況の検討はできない。

5. まとめ

前章までの検討から、滋賀県内出土の「丸石」と考えられる石器について、次のことを指摘したい。

①形状が八ヶ岳山麓の遺跡から出土するものと酷似することから、「丸石」である可能性がある。とくに六反田遺跡例は、東日本からの影響を強く受ける縄文時代中期末の所産である可能性があり、何らかの関係性も想定される。

②これらがどこからもたらされたのかは不明だが、少なくとも六反田遺跡については、近接地域ではないと思われる。あるいは直線距離にして約140～170km離れた八ヶ岳山麓から搬入された可能性も想定される。

③八ヶ岳山麓では祭祀遺物とされているが、滋賀県の事例は、現状の出土状況では判断しがたい。

以上、雑駁に論を進めてきた。不十分ではあるものの、研究ノートということでご寛恕願いたい。

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- 大阪府立弥生文化博物館（2012）『縄文の世界像—八ヶ岳山麓の恵み—』
- 小島孝修（1998）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—地域の検討2. 湖東南部地域—」『紀要』第11号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小島孝修（1999）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—地域の検討4. 湖西北部地域—」『紀要』第12号、財団法人滋賀県文化財保護協会

- 小島孝修（2001）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—地域の検討6. 湖西南部地域—」『紀要』第14号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小島孝修（2005）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—遺跡集成補遺編1—」『紀要』第18号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小林公明ほか（1988）『唐渡宮 八ヶ岳山麓における曾利文化期の遺跡群発掘報告』富士見町教育委員会
- 小松隆史ほか（2004）『坂平 八ヶ岳山麓における前期初頭から前葉の集落址』富士見町教育委員会
- 瀬口眞司（1998）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—地域の検討1. 湖東北部地域—」『紀要』第11号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（1999）「同一地域の検討3. 湖南地域—」『紀要』第12号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2000）「同一地域の検討5. 湖北地域—」『紀要』第13号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2013）『中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書 3-2 六反田遺跡Ⅱ』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県教育委員会（2011）『平成22年度滋賀県遺跡地図』
- 「土偶とその情報」研究会（1999）『西日本を巡る土偶』
- 仲川 靖（1997）『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 中沢 厚（1988）「Ⅱ. 丸石神の謎」『石にやどるもの 甲斐の石神と石仏』平凡社
- 富士見町立井戸尻考古館（2006）『井戸尻』第8集
- 堀 真人（2013）『中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書 3-1 六反田遺跡Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 町田勝則（2000）「石器の研究法—整理作業、指導と実践—」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』竹石健二先生・澤田大多郎先生の還暦を祝う会
- （こじま たかのぶ：企画調査課 主任）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.29 2016.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages